様式３

令和元年度学校防災推進協力校　研究最終報告書

校　　名　静岡県立清水南高等学校
校長氏名　石川　芳恵

１　研究主題

みずから命を守る防災教育

２　学校の実態（教員数、学級数、児童生徒数、学校・地域の特色等）

本校は、昭和38年に全日制普通科高校として創立され、昭和61年に芸術科、平成15年に中等部が設置された、県中部にある公立中高一貫校である。中等部は各学年３クラス、高校は各学年芸術科１クラスと普通科３クラスから成り、令和元年度の生徒数は中等部341名、高校402名、教職員数は全体で66名である。

学校は静岡市清水区にある三保半島の付け根に位置しており、南側は海までおよそ150m、北側はおよそ350mと、海に囲まれた環境にある。海抜は約７mあるが大地震に伴って津波が発生した場合、南側海岸の予想津波高は８～９m、北側海岸は５mと、学校周辺では甚大な被害が予想される。また、生徒の通学域は広範囲にわたり、通学方法も様々である。津波時の想定浸水域は学校の間際まで迫っており、多くの生徒の通学路も浸水被害を受けると考えられる。

地域の特徴として、静岡市清水区折戸地区では高齢化と人口の流出が進み、居住者が減少している。一方で、地区には本校に加え、大学とその付属小・中・高校や海上技術短期大学校があるので、昼間の学生人口は大変多い。日中に大きな災害が発生し、水害などにより地域が陸の孤島化した場合、高校生が避難場所で大きな役割を果たすことが期待されると予測される。

３　研究経過

(1) 研究の全体計画

上記のような環境において、生徒は在校時だけでなく登下校時にも、自ら考えて行動することや、水による被害から命を守るための知識と判断力が必要になる。そこで、「みずから命を守る防災教育」という研究主題を設定した。生徒が受動的ではなく「主体的に（自ら）行動ができるようになる」ことを目指し、以下を防災教育の重点目標として、実際的な訓練や体験、講演会等を実施していく。

①地震や津波の本当の怖しさを理解する
②様々な場面で正しい判断ができるようになる
③被災時に果たすべき役割を理解し、体験する

(2) 研究組織

総務課防災担当を中心に、防災訓練や講演会の企画・運営を行い、防災教育を推進している。生徒の活動は、平成30年度は中等部と高校の各クラスから２名以上

の志願した防災係の生徒（合計71名）が中心となり、クラスの生徒へ日頃から防災意識を高めるための呼びかけを行った。令和元年度には、防災係を生徒会組織の防災委員会として位置づけ、さらに組織を強化した。

(3)　１年次の研究の内容等

①地震や津波の本当の怖しさを理解する

（ア）　防災学習会　　平成30年11月７日（水）実施

「視聴学習（TEAM防災ジャパン　津波編）」

津波が起きるしくみと避難の際の心がまえを、映像とワークシートを用いて学習した。津波から身を守るには、日頃から町の様子を知り、避難ルートを考えておくことが大切なことを理解させた。津波の速さと威力を知り、避難場所を選択するときの必要な情報について確認をした。

《生徒の感想》

- 津波はゆっくり来ると思っていたが、思ったよりも早くて驚いた。
- 自分の身は自分でしか守れない。
- 川に近づくのをやめようと思った。
- 60cm の津波で車が動くのは初耳だった。

（イ）　被災地訪問生徒の報告会　　平成30年８月30日(木)実施

高校生防災人材育成事業で東北の被災地を訪問した生徒の報告会を、全校生徒を対象に行った。復興が予想していたほどは進んでいないことについて写真を用いて発表し、現在でも多くの世帯が仮設住宅で生活していることを伝えた。また、現地の高校生との交流で感じたことを全校生徒と共有し、津波に備えて知っておくべき知識のクイズを行った。

被災地訪問生徒の報告会

（ウ）　防災講演会　　平成31年３月18日（月）実施予定

岩手大学の高橋和夫特任教授をお招きし、講演会を行った。東北大震災時、大槌高校に勤務されていた御経験から、実際の映像を交えながら、①津波の恐ろしさ、②津波発生時にとるべき行動、③被災後に中高生が果たした役割の３点を中心にお話いただいた。

②様々な場面で正しい判断ができるようになる

（ア）　通学路の避難地確認

平成30年11月７日（水）実施

津波に関する視聴学習後、通学路の様子や避難ルートを確認するために、ワークシートを用いた活動を行った。地図上で通学路をたどる作業を通

通学路避難ワークシートの一部

して、通学路が海に近いことや浸水域になっていることを確認した。また、通学路付近の避難地や避難タワーの位置を確認し、通学路上の任意の場所にいた際の避難行動のシミュレーションを行った。

《生徒の感想》
- 自分の通学路は道が細く大きな建物が少なかったので、避難時は高台を目指したい。
- 思ったより海の近くを通学していることがわかった。
- 今日の帰りから、通学路中の避難場所を確認したいと思った。

（イ）　防災訓練　　第１回　平成30年４月23日（月）実施
　　　　　　　　　　第３回　平成31年１月24日（木）実施

　年度当初の第１回防災訓練では、基本的な避難のルールを学び、通常の教室にいる場合にどのような避難経路をとるかについて確認をした。
　第３回防災訓練は、生徒へは非通知で行い、生徒が主体的に避難行動をとれるかどうかの確認を行った。また、移動教室時や体育館・多目的室利用時等、場合に応じた避難をする際に生じる問題点や課題の洗い出しを行った。

第１回防災訓練

③被災時に果たすべき役割を理解し、体験する

（ア）　防災新聞の作成

　夏休みに防災係の生徒が中心になって、防災新聞を作成し、２学期に全員の生徒が読める場所に新聞を掲示をした。グループごとに「津波だ！逃げい！」、「災害のときに最優先で準備しておく防災グッズ」、「静岡における津波の被害」、「防災クイズ」等のテーマで、模造紙８枚の新聞を作成・掲示した。

防災新聞

（イ）　防災訓練　　第２回　平成30年８月30日（木）実施

　クラスや防災組織係ごとに、高層階からの救助袋による脱出、発電機操作、消火、マンホールトイレの設置、AED、けが人の救助と救護等の体験実習や訓練の見学を行った。折戸地区の防災役員の方々にも参観していただき、避難地としての地域の期待や備えについて御意見をいただいた。

救助袋による脱出体験

《生徒の感想》
- ●　見学だけではなく、体験実習を増やして欲しい。
- ●　災害時にゆっくり説明を読んでいる暇はない。
- ●　担架がないときの救出法が知れてよかった。
- ●　マンホールトイレは想像していたものよりしっかりしたものだった。

(4)　２年次の研究の内容等

２年次は、昨年度の研究を踏まえ、より理解を深め、自分で判断したり果たすべき役割を考えたりすること、発災を想定し、それに備えたりすることに重点をおいた。

①　地震や津波の本当の怖しさを理解する

（ア）　被災地訪問生徒の報告会　　令和元年８月29日（木）実施

ふじのくに防災人材育成事業「被災地訪問研修」に参加した１年生３名が、全校生徒を対象に報告会を行った。折戸地区の自治会の方々にも御参加いただき、折戸地区の課題を共有するとともに、高校生が考える果たすべき役割に関する提言を聞いていただいた。

（イ）　防災リーダー育成研修会　　令和元年10月21日（月）実施

オープンスクールの代休日を利用し、中等部と高校の防災委員21名が、焼津市の防災学習室「しえ～る」に行き、研修を行った。台風により関東地方が大きな水災害を受けた直後であり、焼津市の水害に対する備えやドローンによる防災活動に関する講義から多くを学んだ。また、起震車による地震や３Dによる風水害を体験した。

防災リーダー研修会

《生徒の感想》
- ●　誰かの指示に従えばよいのではなく、自分で調べ情報を得ておくことが大切だと分かった。
- ●　災害は他人事だと思っていたが、身近なものであり、備えておくことが重要だ。

（ウ）文化祭での起震車による地震体験　令和元年６月８日（土）実施

文化祭展示の一般開放日に起震車を派遣していただき、生徒・保護者・地域住民合わせて181人が、地震による揺れを体験した。

②　様々な場面で正しい判断ができるようになる

（ア）　地区別集会　　令和２年１月８日（水）実施

中高一貫校である本校では、生徒の居住地区が広範囲に渡るため、これまで

居住地区ごとに集まる機会を設けていなかった。しかし、通学時に災害に遭遇する可能性もあり、同じ地区に住む６学年の生徒が顔を合わせておく機会として22地区に分かれ、地区別集会を実施した。

（イ）　防災学習会　通学路の避難地確認

令和２年１月８日（水）実施

防災学習会

地区別集会実施後、通学路付近の避難地や避難タワーの位置を確認した。同地区に住む中等部と高校の生徒が一緒にグループを作り、iPad等を利用して、避難地の確認後、配布された地図に通学路を書き込み、通学路上にある避難タワー等を確認・記録した。

（ウ）　防災訓練　　第１回　平成31年４月22日（月）実施

第３回　令和２年１月23日（木）実施

年度当初の第１回防災訓練は例年通り基本的な避難の方法と場所の確認を行った。第３回防災訓練は非通知で、昼休みに行った。生徒が自分自身で判断し、安全確保のために避難できるかどうか、また、屋上点呼を正確に行えるかどうかを検証した。

③被災時に果たすべき役割を理解し、体験する

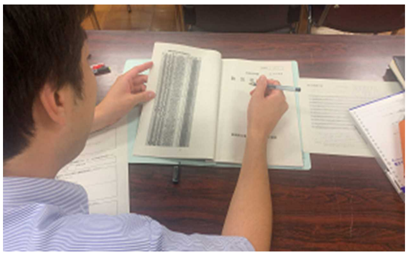
（ア）　防災備蓄品の整理

これまでの防災学習で学んだ、普段からの備えの大切さを踏まえ、防災委員が防災備蓄品の確認と整理を行った。入学年度ごとに生徒用の飲料水と食料の備蓄する場所を確定し、整理した。発災時の速やかな活用のため、備蓄品の種類・数・有効期限などを一目見てわかるように、備蓄場所の整理の工夫の重要性が確認できた。

（イ）　防災訓練　　第２回　令和元年８月29日（木）実施

クラスや防災組織係ごとに、高層階からの救助袋による脱出、発電機操作、消火、マンホールトイレの設置、AED、けが人の救助と救護等の体験実習や訓練を消防署の協力のもとに行った。

（ウ）　教職員による防災研修　令和元年８月５日（月）実施


教職員による防災研修

教職員の防災意識を高め、役割を確認するために、夏季研修日に防災研修の時間を設け、折戸地区の抱える危険性の共有と、「防災計画書」と「危機管理マニュアル」の読み合わせを行った。研修後のアンケートでは、防災に関する研修が新鮮でよかったという意見もあり、97.5％の教員が有意義であったと答えた。

様式３

（5）研究成果、次年度以降の展開

【研究の成果】

防災教育研究の取組の最も大きな成果は、職員、生徒共に防災に対する意識が高まったことである。令和元年 12 月に全校生徒を対象に行ったアンケートでは、63％の生徒が普段から災害について真剣に考えていると答えた。また、ライフラインの寸断に備え、非常食や水を備蓄している答えた生徒は 71％であった。アンケート結果からも、生徒が避難方法や防災活動に関して「自分ごと」として考える傾向が強まったことがわかった。重点項目ごとの成果は次のとおりである。

① 地震や津波の本当の怖しさを理解する

生徒は、被災地を訪問した仲間の発表や、防災講演会を通して、これまでの学習や報道などで漠然と理解していた地震や津波の恐ろしさを、身近なこととして感じることができた。また、自らの知識の不十分さを認識し、備えておくべきことや訓練の必要性が生徒の中から意見として出されるようになった。

② 様々な場面で正しい判断ができるようになる

地図を用いた通学路上の避難地を確認する取組は、個々の生徒の状況に合った活動であったため、生徒が実際に災害に直面したときにとるべき行動を考えるきっかけとなった。

第１回と第３回の防災訓練では発災時の所在場所に応じた避難経路や避難場所の確認ができたり、避難上の問題点が明らかになったりしたことで、従来のマニュアルの在り方を見直す機会となった。特に、第３回の非通知避難訓練は、生徒の主体的な避難状況を見守るという視点を教職員が共有し、その結果を受け今後の指導の方向性を検討することができた。

③ 被災時に果たすべき役割を理解し、体験する

第２回の防災訓練では、地域の防災役員の方に参観していただき、高校生が果たせる役割を御理解いただくことができた。

防災リーダー育成研修会に参加した生徒は、中学生・高校生が果たす役割を理解し、防災リーダーとしての意識を高めることができた。クラスや部活動の生徒に学んだ内容を伝達したことにより、全体の防災に対する意識づけにもなった。

【次年度以降の展開】

（ア） 生徒の防災に対する意識の向上や主体的な行動は以前よりも見られるようになったが、今後も多様な避難訓練（登下校時、放課後の部活動時など）を計画・実施し、実践的備えの充実を図る。

（イ） 防災講演会、防災学習会などを継続的に実施し、生徒の防災意識のさらなる向上や維持に努める。

（ウ） 自然災害、特に津波を恐れるだけではなく、日頃からの備えと正しい判断により大きな被害を防ぐことができるということへの理解を深める。

（エ） 防災意識向上の重要性を生徒・教職員・保護者・地域住民で共有できるように働きかけを継続していく。